教育の陰に

ドキュメンタリー

学校発事件簿

篠ノ井旭高校名誉校長
若林繁太著

教育の陰に

ドキュメンタリー

学校発事件簿

篠ノ井旭高校名誉校長
若林繁太著

著者略歴

若林繁太（わかばやし　しげた）

1925年生まれ
明治大学大学院民事法学研究科終了
1960年長野県篠ノ井旭高等学校教諭，1974～85年同校校長
1978年，第27回読売教育賞受賞
1988～90年愛知県豊川高等学校校長
現在，篠ノ井旭高等学校名誉校長，長野県教育技術研究所長，
財団法人黄柳野学園設立準備財団理事長
『教育は死なず』（正・続・続々編）『教育よ，よみがえれ』
『学校を立て直す』『教師よ！』等，著書多数。

現住所　長野市篠ノ井内堀区927（〒388）
0262－92－3145

教育の陰に ドキュメンタリー 学校発事件簿

1994年11月16日　初版第1刷発行
1995年3月10日　初版第2刷発行

著　者　若林繁太
発行者　谷口　隆
発行所　教育出版株式会社
〒101 東京都千代田区神田神保町2-10
電話 03-3238-6965 ·振替東京9-107340

©S. Wakabayashi 1994
Printed in Japan
印刷　松澤印刷
製本　田中製本
落丁・乱丁本はお取替いたします。
ISBN4-316-38400-7　C3037

まえがきにかえて

新刊書の多くを取り扱っている著名な書店に働く店員に尋ねたことがあります。

「今、一番教育書を購入する人たちは、どんな人たちですか」

「教育書？　そうですね、ＰＴＡの母親らしい女性が一番かも知れませんね」

「おや？　私は学校の先生たちかと思っていたんですが」

「最近の先生は、あまり本を読みませんね。学校への納入は多いのですが、先生個人の購入となると、私たちはあまり期待していません」

私の期待していたものとは異なる意外な答えが返ってきましたので、すっかり私は考え込んでしまいました。

「そんなことって、本当だろうか？」

私の経験を参考にしては、教師の皆さんに申し訳がないと思うのですが、私の教師時代、果たして新刊書をそんなに購入しただろうか、と考えてみると、何かうなずけるような気もするので

す。

生まれつき読書好きの私は、貧しかった学生時代には食費以外はほとんどが本代でした。ときには食費を削って、好きな本を求めたこともありました。

けれど、教師になってから、金銭的にゆとりができたにもかかわらず、そんな思いで本を購入した記憶はないのです。

でも、決して読書がいやになったのではありません。読んでいる暇がないのです。しかし、活字だけは今まで以上に眼にしていると思うのです。たとえば、教科指導書、行事企画書、生徒指導手引、授業計画案など、机上には読むことを要請されているプリントや書類が山積しているのです。

ですから、よほど必要なものか、特に興味を引くもの以外は時間をかけて読む気にはなれないのです。けれども、読書意欲は十分に持っているはずです。何故なら、拙著『教育は死なず』の読者のうち、最も多いのは学校の先生たちだったからです。

その教師たちから、時折感想文や書評が送られてきますが、その多くは、

「最初、教育書と思ったら、抵抗を感じていましたが、二、三ページ読んでいるうちに、のめり込んでしまって、とうとう徹夜して読了しました。

これは楽しい読み物でした。しかし、読み終わった後で、ゆっくりと滲み出るような感動が胸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

に湧き、やはり、これは教育書だったんだ、と思いました」

と感想を述べています。

ですから、先生たちの読書意欲は決して減退しているわけではないことを、私が一番よく知っているのです。ただ、意欲の湧く本にめぐり合わなかっただけでしょう。

私は寄せられた先生方の感想文のなかに、その答えがあると考えました。先生たちに必要なのは、「これだ」と思ったのです。

改めて教育書と銘打つ必要はないのではないでしょうか。楽しく、気楽に読めて、あとで感動の滲み出るような本が必要なのではないか、と考えたのです。

そのためには、実話を芯に、ユーモア、風刺、色気、時にはフィクションがあってもよいでしょう。あとで少しでも教育に資することができればよいと考えて、読み易い文体を選び、この書の企画を試みました。電車のなか、休日などに寝転んで楽しんでもらえるように心掛けたつもりです。

そして、読み終わったあとで、これからの教育に参考になる指針を、少しでも湧かすことができれば、この書を発刊した目的は達せられたと思うのです。

この企画のもくろみが成功すれば、これに越した喜びはありませんし、教育書に対する世間の考え方も、大きく変化するに違いないと思っています。

現今、教育現場の教師たちは、異常とも思える子どもたちの出現に戸惑い、青年期の子どもを持つ親たちは、その対応に自信を持っていません。それは眼前にいる一人一人の子どもに最も適応した教育、対応を必要とするのが、新しい豊かな時代の教育だからです。

したがって、教師はいつも教育を創造して行かねばなりません。もう、マンネリ化教育は通用しない時代が到来したのです。それが豊かな時代に適応できる教育なのです。

教育を創造するためには、数多くの実践例を知っていなければなりませんし、臨機応変できる豊富な知識がなければなりません。

現今教師に要請される多くの期待が、教師の苦労をいっそう増大させています。その要請は単なる知識だけではなく、人間性や、心理学的レベルまで幅広いのが特徴です。

これからの教師は、子どもレベルの知識も要求されるでしょう。リーダーシップや雑学の大家的要素も必要となってきますから、たいへんな負担です。

教師の最も疲労を感ずる精神的知識を、本書が少しでも補塡するのに役立てば喜ばしいと思っています。

教育の陰には多くの問題が発生しています。そして、その解決のために現場教師たちは全力を尽くしていることでしょう。その努力が報いられるためにも、学校の実態を進んで校外に知らせる度量が必要となってきましょう。いわゆる、学校の閉鎖性から開放性へと転換が迫られている

とも言えましょう。

今までと全く異なる方法で、開放的な現実伝達を試みたのが本書だと思って下さってもよいでしょう。

本書に発表された事例は、現在教育界で発生している事件のほんの一部だと思います。また、このような異色性はないにしても類似した事件は枚挙にいとまのないほど多発していることでしょう。

これをお互いに持ち寄って、解決法を探究するのも、教育の閉鎖性を打ち破ることになりますし、教育技術の向上に役立つと思います。

それを提案する意味からも、私が敢えて隗となるつもりで本書を書きました。

著者　記

教育の陰に

学校発事件簿（ドキュメンタリー）

目次

まえがきにかえて

女子高生殺人事件――1

パトカー走る――記念館で事件発生　3
刑事対生徒指導部長　14
芽生えた相互信頼感　23
生徒指導部内の確執　25
警察の捜査、学校側の調査　34
二人の容疑者　49
託児所のドラマ　69
辛い結末　75

爆発の恐怖――99

不運な点火当番　101
爆発犯人に良心があるか　111
疑惑の生徒　123

苦い解決 131

弱者の反撃 137

問題児　高田俊二 139
要領の悪い犯罪 153
犠牲者の自衛手段 167

女生徒と教師の恋 181

女生徒のあこがれ 183
青年教師のとまどい 193
つくられた噂 202
幼い愛の時間 207
たった一人の通夜 214
悪魔の告げ口 224

あとがき

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

女子高生殺人事件

パトカー走る——記念館で事件発生

交通ラッシュが間もなくやってくるというころ、一台のパトカーが警笛をけたたましく鳴り響かせながら、国道十八号線を南から北へと走り去った。

近ごろ、都会を真似た野放図な若者たちが増えたためだろうか、急に暴走族が羽振りをきかせ、こんな田舎道でさえ交通事故が頻繁に発生している。

近くに住む人々は「またか」と一瞬、顔をしかめるだけで、すぐ、そのあとは何の関心も示さない。だが、そのあとにパトカーが二台、やはり警笛を響かせながら追うのを見て、「これは大事故かも知れない、それとも事件か？」とさすがに聞き耳を立てた。パトカーが東から西からゾクゾクと長野市郊外にある県立篠ノ井東高校の校門に集まってきた。

このときになって始めて、付近の人たちも事件と気付いたのか、表に飛び出し、不安そうにヒソヒソと話し合いながら、キビキビと動き回る刑事たちの行動を見守るのだった。何が起きたのか、尋ね歩く者もいたが、誰もが首を振るだけだった。

刑事たちは、黙したまま忙しそうに往き来していたが、その動作からも、ヒシヒシと緊張が伝わってくるようだった。

日ごろは事件の少ない田舎でのこと、こんなにも多くの警察関係者が集まるのは稀有のことである。きっと、重大な事件が発生したのだろうと想像はできるものの、内容については推定することすらできなかった。

事件は、この学校の記念館で起きた。

創立八十周年を迎えた、この学校は最近、それを機に全面的な校舎の増改築工事が行われた。いまでは昔の卒業生たちも「あれが学校？」と首をかしげたくなるような、およそ学校らしからぬ瀟洒な四階建校舎が建っている。付近は山国にふさわしく、周囲を山また山に囲繞された中規模盆地のただなかにあった。

それも、東にかつて上杉謙信の陣地があったという妻女山を控え、西に武田信玄の陣営であった茶臼山が対峙し、この盆地に睨みをきかせている。

両山の間には、鞭声粛々と詠われた夜襲作戦の戦場、横田河原が裾広く横たわっている。上杉謙信と武田信玄が一騎討ちをしたと伝えられる八幡ヵ原は、この学校のすぐ近くにある。東から北に向かって、島崎藤村の「千曲川のスケッチ」で名高い千曲川が流れ、西からは北を目指して犀川が激流を飛ばしながら、急流となって長野市の北はずれで合流し、信濃川と名を改めて越後の国（新潟県）を縦断して日本海に注いでいる。

いわゆる川中島の古戦場跡に最も近い場所に位置する広大な平野の一隅に、この学校は建って

いた。
この学校は、県下でもたいへんユニークな教育で定評があり、久しく事件といわれる問題もなく、地域の評判も上々で、落ち着いた学校と言われていた。
ここで、女子高校生が死体となって発見されたのである。死因は絞殺、暴行の跡も歴然としており、下半身裸の哀れな姿であった。事件の発見者は、バレーボール部の主将でもある三年A組の吉田勝子と顧問教師の小林文子教諭である。
日ごろは気丈なキャプテンの勝子も、刑事の質問にシャクリ上げながら、涙声で答えている。
「わたし、千絵が朝練に出てこないので、おかしいと思ったんです。だって、千絵は一度だってクラブを休んだことはないし、いつも、人より早く出てきて、朝練の準備をしてましたから」
「病気で休んだとは思わなかったの？」
横から刑事が聞いた。
「だって、きのうも『明日の朝練はマット運動よ。千絵、準備頼むわね』と言ったら、『マットを用意しておけばいいのね』と元気に答えていましたから、病気なんて考えられないもの」
「朝練の準備がいやになったとか、寝坊したとは考えられなかったの？」
刑事が再びたたみ込むように尋ねた。
「そんなことは考えられません。あの子は、真面目で、一度だって遅刻したことはありません

し、他の部員たちからも可愛がられていました。
それに、今は一年ですが、三年になったら、キャプテンになるだろうと、自他ともに認めていました。だから、常にキャプテンの仕事を見ていましたので、準備するのは、自分の役目だと、積極的に進んでクラブの仕事をやっていました。そんなことで、いやになることはなかったと思います。
不平など持つことはなかった、と断言できます」
勝子の横に立っていたクラブ顧問で体育教師の小林文子教諭が、補足するように言葉を添えた。
「それで、すぐ探したの？」
「いいえ、マットの準備がしてなかったので、急遽別の練習に切り替え、約一時間ほどで終了にしました。こんなたいへんなことになっているとは、思いもしなかったものですから……」
そこで勝子は、またシャクリ上げた。
「それから、どうしたの？」
刑事の追及は厳しい。
「練習が終わっても千絵の姿が見えなかったので、先生に千絵の不参加を報告して教室に戻りました」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook